紙芝居で語るロシヤ兵の駐留と朝鮮38度線を越え

琴寄　學

- １９４５年８月１５日、太平洋戦争が終わった時に、私は6歳で北朝鮮に居ました。その記録を、故市原麟一氏が主幹していた「土佐民話の会」で紙芝居にして、多くのところで語ってまいりました。
- 紙芝居の絵は、３年前に逝去された早野朝子さんが描かれたものです。彼女は戦後の朝鮮３８度線越えの厳しかった思い出を多く描いて、絵画展を各地で開催しておりました。朝鮮遺骨収集全国の会」の高知支部長としても活動されました。私も一緒にこの活動の参加しておりました。最晩年に、早野さんから多くの絵を頂きましたので、厚紙に張り、紙芝居板にしました。今、高知で北朝鮮からの引き揚げて来た者で、「北朝鮮から引揚の語り部活動」をしているのは、私一人となりました。ここに紙芝居に使った絵と文章をまとめました。

私は、今は北朝鮮になっている満洲と朝鮮の国境の恵山鎮と言う町で、１９４５年８月１５日、「太平洋戦争終結」は、６歳の時に迎えました。私の父、琴寄虎蔵は、警察官として朝鮮に渡りました。その後会社員になり、旅館を経営する家の娘、はまのと結婚しました。1945年、終戦の時は、父は44歳、母は38歳、長女重子、次女良江、三女玲子、私と妹敏子の家族でしが、妹は3歳で亡くなっており、遺骨を私が持ち帰りました。

戦争が終わるまでは、父の収入は充分で恵まれた生活を送っていました。しかし昭和２０年になると召集年齢が４５歳まで引き上げられ、また１７歳未満でも少年兵、大学生の学徒動員も可能となる「根こそぎ召集」となりました。復員していた叔父たちも、再度召集されて、ほとんどの大人の男性は、町にはいなくなりました。

そして「おまえ達を守ってやる」と威張っていた警察や軍の偉い人やその家族は、8月15日前に、ソ連参戦を予知してか、知らぬ間に消えてしまいました。

敗戦から日を置かずして、ソ連軍が、満洲方面から恵山鎮にも進駐してきました。そして祖父が経営する「ふきや旅館」は、共産党本部の看板が掲げられました。

ソ連軍の先発部隊は、ほとんどが頭を剃った「スキンヘッド」の囚人部隊で、腕時計も操作できないほど教養がなく、そして凶暴でした。

ソ連兵は、「女を出せ」と、家、家を探しまわりました。若い女性は、坊主頭になり男の服を着ておりました。ソ連軍には、慰安婦制度がありません。多くの日本女性が犠牲になりました。しかし、姉が迷子になった時に、私達の所に連れ帰ってくれた若いソ連兵士もいました。私達を世話し、助けてくれるソ連兵も多くいました。

戦後20年9月中頃、恵山鎮から移動命令が出ました。屋根のない無蓋貨物列車に、ギュウギュウ詰めにして乗せられました。貨物列車は、動いたり止まったりの繰り返しで、なかなか進みません。

目の悪い祖父が、杖を取り上げられ、枯れ枝を杖代わりにしていた姿が忘れません。女性には、ロスケ（ソ連兵）に乱暴される時に、朝鮮では青酸カリが自決用に渡されましたが、行き渡らず、「猫いらず」も渡されていました。旅館の従業員の若い女性は、「猫いらず」を口に入れたが、水がなく、喉が焼けて身体全体が風船のように膨らんでしまった姿になっていまいました。それでも、内地（日本）に帰りたいと、必死に私達に付いてきました。今でも私の脳裏に、彼女の姿が焼き付いています。

祖父とこの女性は、収容された元山に着いて、間もなく亡くなりました。私達の一団では、9名が元山収容所で亡くなりました。祖父がなくなった時に、額が真っ黒でびっくりしました。シラミが暖かいところを求めて集まっていたのです。

元山で、突然、列車から降ろされたのは、スターリンが「日本人を動かすな」という命令を出したからと思います。元山の収容所生活は地獄でした。まず食べる物がなく、飢えの続く日々でした。草や木の実など食べられるものは何でも食べ、海でハマグリを採って食べました。父は元山で元警察官であったことが分かり、どこかに連れていかれました。

帰って来た時は、ひどくやつれておりました。床に伏していましたが、間もなく亡くなりました、今も、父は拷問で亡くなったと信じています。

酷寒の地で、不衛生は密集生活と食べるものがなく、毎日のように、死んでゆく人が増えてゆきました。凍死、病死（主に発疹チフス）、飢餓死。ひきもきらぬ野辺送りの大八車は、一日数台を数えました。私の心には、それを憐れむ事ことさえ失っていました。亡くなったひとは、凍土に浅く掘った穴に沢庵つけのように埋葬しました。

北朝鮮の故金正日（キム　ジョイル）は2002年に日本人13名の拉致を認めました。横田めぐみさんら8名はすでに亡くなったと発表しました。

死亡の市川修一さんは、元山の海水浴場で溺れて亡くなったとのことですが、元山の海は6歳の子供でも貝が採れるほどの遠浅の海です。

なぜ、あの海で、若い男の人が溺れたのか、不思議でなりません。

南朝鮮の京城で復員していた叔父が、私達が元山で抑留されていることを知り、聾唖者に化けて寝る時には、寝言で日本人であることがバレないように、口に新聞紙を入れて寝て、38度線の山を越えて、私達を助け出しに、来てくれました。1946年4月5日に私達は、元山を脱出しました。

脱出の途中に、集落に入ると現地人が集まって来て、身体検査をさせられ、持ち物も取り上げられました。亡くなった妹の骨壺の遺骨の下に、時計や貴金属を入れておりましたが、骨壺の中は見ませんでした。

元山から38度線までの60里を10日間、かかって突破しました。そのなかで、私が一番忘れられない光景は、白岩山を越える時でした。私と同じ6歳の子のお母さんが倒れました。大人を背負うことは出来ません。回復も待てない。お母さんと子供を木陰に置いて、いくばくかの食べ物を置き、その家族を拝んで発ちました。私と同い歳の子が、「お母さん、お母さん」と、泣いていました。

この逃避行では、途中で朝鮮の叔母さんから、食べ物をもらったこともありました。「日本人に世話になった」と、私達に親切な朝鮮の人はたくさんいました。38度線は、川の向こうでした。川を渡り、「ご苦労さん」という声を聞いて、へてへたと坐り込んでしまいました。

- 帰国から、日本も復興し、「遺骨を収集したい。でればせめて墓参だけでもと、「朝鮮遺骨収集全国友の会」が、結成されましたが、皆が高齢になり解散しました。ほとんどのひとは、悲しできごとを何も語らず、天界に持ってゆかれました。
- 北朝鮮には、約30万人の日本人がいました。北朝鮮も食糧難で、日本人を追い出したいと思ったと思いますが、スターリンの命令で動かすことができませんでした。そこで山道を使用して脱出したことを黙認したのではないでしょうか。
- 　私が38度線越えの60里（２４０km）を徒歩で突破できたのは、足腰が強かったからですが、しかし、元山で抑留されていた時の靴をみたソ連兵の若い兵隊さんが、みかねて立派なシナ靴をプレゼントくれたお蔭と思っております。
- 京城を経由して、昭和21年4月25日釜山港を出航して、4月26日に無事に山口県の仙崎港
- に着きました。夢にまでみた内地（日本）を目の前にして、引き揚げの際に、ソ連兵から受けた恥辱に堪え難く。船から、身を投げた若い女性が居られました。